

展望論文

ポライトネス理論研究のフロンティア

—ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論—

宇佐美まゆみ（東京外国语大学）

本稿では、これまで、いわゆる「ポライトネス研究」としてまとめて言及されることが多かったものを、その目的の違いによって、「ポライトネス記述研究」と「ポライトネス理論研究」に分けて整理し、従来明確に区別されることなく論じられてきた両者を含む「ポライトネス研究」の約30年間の流れを、その違いを明確にする形で概観する。「ポライトネス記述研究」とは、各個別言語におけるポライトネス、敬語体系や敬語運用の研究、それらの比較文化的研究などを指し、「ポライトネス理論研究」とは、言語文化によって多岐・多様にわたるポライトネスの「実現(realization)」の基にある動機とその「解釈(interpretation)」のプロセスを、統一的に説明、解釈、予測しようとする「理論(theory, principle)」に重点をおいた研究である。それぞれの意義と役割、問題点などを確認した上で、本稿では、後者の「ポライトネス理論研究」のほうに焦点をあて、Brown & Levinson (1978/1987) のポライトネス理論が普遍的であるとして提唱されて以降、他の研究者から提起された問題点や、普遍理論追究のために重要なと考えられる新しい捉え方のポイントをより具体的にまとめる。その上で、「ポライトネス理論研究」の今後の課題をまとめ、これまでに指摘してきた様々な問題点を克服する形で構想されている「対人コミュニケーション理論¹⁾」としての「ディスコース・ポライトネス理論」(宇佐美, 2001a, 2002, 2003) の最新の構想の一部を提示する。

キーワード：ポライトネス理論、ディスコース・ポライトネス理論、フェイスワーク、フェイス均衡原理、ミクロ・ローカル／マクロ・グローバルな分析

Frontiers of Studies on Politeness Theories: New Trends in Politeness Studies and Discourse Politeness Theory

Mayumi USAMI (Tokyo University of Foreign Studies)

This paper critically reviews politeness studies of the past thirty years emphasizing the distinction between descriptive and theoretical approaches. Descriptive approaches refer to studies pursuing politeness realizations in various languages and cultures, whereas theoretical approaches refer to studies pursuing common principles, which systematically explain, interpret, and predict motivations that induce (im)politeness strategies in human interactions in various cultures. After examining the roles and significance of both approaches, I focus on the theoretical studies of politeness and reexamine Brown and Levinson's politeness theory and other major theoretical politeness studies inspired by their theory. I then summarize some crucial points to be developed and integrated into politeness theory in order to establish a more comprehensive discourse-level theory of politeness.

I introduce Discourse Politeness Theory (DPT), which is based on a series of empirical studies of discourse behavior in naturally occurring conversations. This theory broadens politeness research to encompass the concept of relative politeness and permits the explanation of both politeness and impoliteness within the same framework, and allows the pursuit of common principles of discourse politeness in various languages. It can be considered both as a system of the principles of motivations that induce politeness strategies and as a system of the interpretations of both polite and impolite behavior in human interactions. In this paper, I introduce the newly developed parts of the theory, in which I propose that (im)politeness in human interactions should be captured from a more macro-global

宇佐美：ポライトネス理論研究のフロンティア—ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論—

perspective in addition to a micro-local level. I also discuss the factors that I incorporated into the theory, such as *face-balance principle*, *speaker's desire to save his/her own face*, and *bystanders presence*, when estimating the degree of face threat in a certain act.

Key words: politeness theory, Discourse Politeness Theory, facework, face-balance principle, micro-local/macro-global analysis of politeness

1. ポライトネス記述研究・ポライトネス理論研究の混同の問題とこれまでの流れ

Brown & Levinson (以降、B&L) が、1978/1987年に、ポライトネス理論を普遍理論として提唱してから、早30年が過ぎた。1978年の長い論文が発表されて以降、この理論が、野心的にも、「普遍理論」を標榜しただけに、様々な文化圏からの反論も渦巻き、その反響や影響は、言語学（語用論）のみならず、社会学、文化人類学、心理学、コミュニケーション論にも及んだことは、周知のとおりである（その概観については、宇佐美, 1993b, 1998, 2002を参照）。その反響は、英語で書かれた雑誌で何度もわかつて特集が組まれたことからも明らかである（*Multilingua* 8 (2)-(3), 1989; *Journal of Pragmatics* 14 (2), 1990; *Multilingua* 12 (1), 1993; *Journal of Pragmatics* 21 (5), 1994）。1990年代には、非印欧言語、特にアジア言語の研究者から、B&Lの理論が西洋中心思考であるとの批判が続出し、一種ブームのようにさえなった²⁾が、それは裏を返せば、それだけの反論が出るほどに、B&Lのポライトネス理論に関する研究が、非印欧言語についても行われたということを表している。しかし、これらアジア言語の研究者から出された批判の中には、妥当とは言えないものが少なからずあった。その原因のひとつに、以下に概観する約30年にわたる「ポライトネス研究」の流れにおいて、各個別言語におけるポライトネス、敬語体系や敬語運用の研究、それらの比較文化的研究などの「ポライトネス記述研究」と、言語文化によって多岐・多様にわたるポライトネスの「実現(realization)」の基にある動機とその「解釈(interpretation)」のプロセスを、統一的に説明、解釈、予測しようとする「理論(theory, principle)」に重点

をおいた「ポライトネス理論研究」とが、その目的の違いにもかかわらず、区別されることなく論じられてきたという経緯がある。当然の成り行きとして、議論は噛み合わないまま現在にまで至っているというのが実情である³⁾。

本稿では、これらを踏まえ、「ポライトネス記述研究」と「ポライトネス理論研究」を明確に区別した上で、主に、B&Lのポライトネス理論が提唱されて以降、この理論に関して行われた様々な議論を振り返り、その後、他の研究者によって指摘されたB&Lの理論の問題点や、代案として提出された他の概念や枠組み、アプローチなどを概観する。そこから明らかになる問題点や新たな提案を踏まえた上で、それらを克服すべく構想中の「ディスコース・ポライトネス理論（以降、DP理論）」（宇佐美, 2001a, 2002, 2003）の最新の構想の一部を提示する。

さて、1990年代初期に、B&Lのポライトネス理論⁴⁾について、大きく問題とされた点は、次の5つに集約できる。①操作的に定義された「フェイス」という概念への批判⁵⁾、②「ポライトネス(politeness)」という用語・概念を問題とするもの、③B&Lのフェイス侵害度の見積もりの公式 $Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx$ に関して、様々な文化や状況におけるポライトネスの実現が、彼らの予測通りにはならないという批判、④B&Lの定義した「ポライトネス」を「個別言語の敬語使用の原則」と同一視するという誤解に基づいて行われた個別言語研究の結果を、B&Lのポライトネス理論の普遍性への反証としようとするもの、⑤B&Lが提示したポジティブ・ポライトネス・ストラテジー、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーに両面性があるということや、その「フェイス侵害度(FT度: degree of Face Threat)」に応じたストラテジー選択

の優先順位や、40の主要ストラテジー間の矛盾や問題点への批判、である。

これらの批判の中には、B&Lの理論の正確な理解に欠ける、的を射ていないものが多いことは、既に、繰り返しまとめてきたが(Usami, 1994, 1999, 2002a; 宇佐美, 2001a, 2002)、本稿では、その議論の混乱と、研究者の見解の相違が、理論提出から30年が経過した現在、どのような学界の動向となって表れているかを、改めてまとめる。

さて、1990年代後半になると、非印欧言語、特にアジアの言語文化におけるポライトネスを扱うには、文化相対性をもっと考慮する必要があるということが声高に叫ばれ、その動きをまとめたかのように、1999年には、第1回 International Symposium on Linguistic Politeness: Theoretical Approaches and Intercultural Perspectives (ISLP 99) が、タイのチュラロンコン大学で開催された。そこには、開催国のタイはもちろんのこと、日本、中国、アイルランド、英國、スウェーデン、スペイン、ギリシア、オーストラリア、米国等々世界各国から、ポライトネスに興味のある研究者が集まつた。そこでは、非西欧の視点、特にアジアの視点が強調され、B&Lの理論を越えなければならないというようなことが合言葉のように繰り返された⁹。

その前年の1998年には、英國の研究者を中心とする Linguistic Politeness Research Group (以降 LPRG) が結成され、研究会や国際学会が企画・実施されるようになつた。そして、今世紀に入ってからも、2002年には、the e-journal series, Working Papers on the Web, vol. 3 が politeness の特集を組み、2003年には、Journal of Pragmatics が、それまでの議論で整理されていなかった face の特集を改めて組む。また、2002年に、LPRG の主催で開催された International Symposium on Linguistic Politeness の発表論文の一部を編んだものが、Multilingua 23 (1)-(2)、2004にまとめられ、2005年2月には、LPRG のメンバーを中心に、ポライトネス関連研究に特化する Journal of Politeness Research (Walter de Gruyter) が創刊された。2006年にも Multilingua 25 (3) が politeness を特集し、さらに2007年には、Journal

of Pragmatics 39 (4) が、「アイデンティティ、フェイス、ポライトネス」という観点からポライトネスに関する特集を組んでいる。

また、2000年代に入つてからは、ポライトネスに関する小さな波とも言えるように、細部の違いは当然あるものの、大まかには同じような立場の著書が相次いで出版され(Eelen, 2001; Mills, 2003; Watts, 2003; Locher, 2004)，現在に至つていると言えよう。また、日本語とポライトネスに関する英語による著書も増加してきた(Fukushima, 2002; Suzuki, 2007; Usami, 2002a, 等)。

これらの動きを一言でまとめることは到底できないが、B&L以降、30年の時を経る間に、多様な言語・文化や場面におけるポライトネスの実現(realization)についての研究、すなわち「ポライトネス記述研究」が活発に行われることによって、この領域全体が活性化され、多くの蓄積できる資料や知見が生まれたことは確かである。しかし、その一方で、ポライトネス理論研究の「理論」の部分、つまりその「普遍性の追究」の研究については、それ以前の段階で相反する意見や立場、研究方法が乱立し、議論が噛み合わないまま、それぞれの主張が逡巡し続け、それほどの進展を見せてはいるとは言えないというのが筆者の見方である。ただ、流れとしては、(安いな細分化は望ましいとは言えないが,) それぞれの主張からすれば当然のごとく、研究者の志向と立場は、2極化の傾向を示しつつある。すなわち、「文化相対性を最重要として、普遍理論を構築しようなどというのは、そもそも無理だ」とする立場⁷(Eelen, 2001; Watts, 2003; Locher & Watts, 2005; Mills, 2003) と、あくまで文化の違いを超えた人間のコミュニケーションの統一的説明(すなわち、普遍理論)を追究する意義を認める立場(Bayraktaroglu, 1991; Brown, R., 1990; Davies, 2005; Fraser, 2005; Holtgraves, 2005; Janney & Arndt, 1992; 宇佐美, 1993b, 1998; Usami, 1994, 1999, 2002a)、さらには、普遍理論の確立のために、有効な捉え方、より具体的な代案を提出しようとするもの(Bayraktaroglu, 1991; Janney & Arndt, 1992; Jary, 1998; Meier, 1995; Usami, 1994, 1999, 2002a, b, 2006a, b, c)

宇佐美: ポライトネス理論研究のフロンティア—ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論—
宇佐美, 2001a, b, 2002, 2003) という2つの立場である。

この2つの考え方の違いは、安易な分類は避けねばならないが、便宜上、あえて概観すると、前者の「文化相対性を尊重し、多様な文化を記述することが重要で、普遍理論の構築是不可能である、或いは、目指す必要がない」とする立場を取る研究者は、概して、(記述)言語学、会話分析(CA)⁸の手法を取り研究者が多く、後者の「文化相対性の重要性は当然のこととして認めた上で、言語行動の表層に表れる文化による多様性の背後にある、人間の対人コミュニケーション行動の動機と解釈のメカニズムとしてのポライトネスの普遍理論は、構築を目指す意義がある」とする立場を取る研究者には、社会心理学、認知心理学などの実証科学を背景とする研究者が多い。また、前者は、その意識の有無にかかわらず、なんらかの「ポライトネス記述研究」を行っている研究者が多く、後者は、「ポライトネス理論研究」に興味を示す研究者が多いということができるだろう。この2つの立場の背後にある研究分野、或いは、研究者が前提とする「研究」というものについての捉え方や前提には、大きな溝があると言わざるを得ず、そのことを確認、共有せずして、単に「ポライトネス」という共通の「言葉」(共通の「概念」になっているとは、到底言えない)のみを基に、同じ次元で議論しても、あまり生産的とは言えない。(ただ、残念ながら、それがこれまでの経緯と言わざるを得ない。) そして、後者の「普遍理論」の構築が可能であるとする研究者の中には、社会心理学、対人コミュニケーション論、認知心理学などの隣接の関連分野に、その研究発表の場の重心を移し(もともと隣接分野の出身者が多いこともある)、前者の主張が比較的多く発表されている言語学における「語用論」の学界とは離れて、異なる分野で各自、研究を発展させていく感もある。

いずれにしても、その包括性・体系性がより重要な「ポライトネス理論研究」のほうは、結局のところ、全体的には、「ポライトネス記述研究」と比べて数が少ない。しかし、上記の研究者によつて、B&Lのポライトネス理論の弱点を克服するた

めの重要な「視点」や「理論の構想」はようやく出そろつたと言える段階である。

2. B&Lのポライトネス理論への批判の再検討 —何が「ポライトネス理論研究」にとって建設的指摘なのか

B&Lの理論に対する批判については、むしろ、その批判自体に問題があるものが多かつたとさえ言える。それらについては、既に、繰り返し指摘してきたが(Usami, 1994, 1999; 宇佐美, 2001a, 2002)，その後の研究の流れにおいても未だ議論が噛み合わないまま逡巡している感がある。そこで、ここでは、改めて、「ポライトネス理論研究」つまり、普遍理論の構築を目的とするということに的を絞って、B&Lの理論に関して、未だ共通理解が得られていない5つの問題点について、より具体的に再整理する。その上で、どの点が、これからの「ポライトネス理論研究」において、重要なのかをより明確にしたい。

(1) 「フェイス」という概念への批判

これは、B&Lが、Goffmanの概念を参考にしながらも、操作的に定義した「フェイス」の概念を鍵概念として「ポライトネス理論」を「普遍理論」であると主張していることに対して、個別の言語・文化における固有の「フェイス」の概念を持ち出し、それが文化によって異なるというしぐく当然ではあるが、B&Lのポライトネス理論におけるフェイスの位置付けと役割とは、ほとんど無関係と言つてもよいことを根拠に、B&Lの理論の普遍性に疑問をなげかけるもの(Matsumoto, 1988; Gu, 1990等)である。この類の批判は数多くなされ、2000年代に入っても、相変わらず、「フェイス」をめぐるシンポジウムや特集などが組まれる(Journal of Pragmatics 39 (4), 2007)。ただ、そこでの関心の中心は、結局のところ、「文化による多様性」を記述し、それを尊重しようという姿勢であるということがより鮮明になってきた。つまり、「ポライトネスの普遍理論」という観点からは、どんどん離れていく傾向にある。文化による多様性を記述していくことの重要性は、疑うべくもない。現に、DP理論では、その実証的研究を

行う際、文化によって異なる「基本状態 (default)」(宇佐美, 2001a, 2008 予定) を、同定していくことが最初の手順となる。そういう意味でも、どのような言動が、各々の文化でフェイスを満たしたり、侵害することになるのかということは、極めて重要で、それらを明らかにしていくことは、不可欠であり意義であることである。但し、「ポライトネスの普遍理論探求」の観点からは、「文化的な概念」としての「フェイス」や一般の人々の「ポライトネス」の捉え方を根拠として、B&L の理論の普遍性を批判するのは、的外れであるということは、改めて強調しておきたい。むしろ、理論構築の観点からは、以下でも述べるように、「フェイス」を操作的に定義し、媒介変数として機能させた点こそが、B&L の理論の優れた点であると捉える必要がある (Brown, R., 1990; Holtgraves, 2005; 川口他, 2002; 宇佐美, 2001a, 2002 等)。「フェイス」という概念を、あくまで「文化的な概念」と捉え、その中身の文化比較を行いたいのであれば、それは、ポライトネス理論研究の枠組みや興味の観点からではなく、「フェイス」の比較文化的研究として行えばよいことである (最近は、そのようになりつつもある (Spencer-Oatey, 2007 参照))。先述した昨今の研究動向の 2 極化傾向は、そのような自然の流れの方向を反映しているとも言える。

一方、このような言語学における語用論研究の文脈とは、少し距離をおいたところで、例えは、心理学の分野では、B&L の定義する「ポジティブ・フェイス」と、「ネガティブ・フェイス」は、それ以前から人間の根本的欲求として広く受け入れられている「接近欲求」(挨拶、褒め等) と「回避欲求」(繩張りを侵害することの回避、タブーの回避、他人の非に注意を向けることの回避等) と類似の発想を持つ概念であることから、先に概観したいわゆる「ポライトネス記述研究」においてのように問題にはされず⁹⁾、その「概念」の文化的相違は、当然、フェイス侵害度の公式に含まれるものとして、比較的すんなりと受け入れられてきている (Janney & Arndt, 1992; Bayraktaroglu, 1991; Brown, R., 1990; Holtgraves, 2005; Meier, 1995 等々)。もちろん、様々な問題点も指摘されてはいるが、B&L の理論の本

質を、その用語や概念の紛らわしさによって全否定することはなされていない。あくまで、B&L の理論における「フェイス」の意味するところは、人間の対人コミュニケーション上の「基本的欲求」¹⁰⁾と置き換えられて理解される。そして、この「フェイス」という概念を操作的に定義して設定することによって、B&L のポライトネス理論の「フェイス侵害度見積もりの公式 ($W_x = D(S, H) + P(H, S) + Rx$)」における「媒介変数」として、実際の「言語使用」と D, P, R という「社会的変数」を関数的に捉えることが可能になったと捉えられている。つまり、むしろ、この「フェイス」の概念を媒介変数として設定したことこそが、「ポライトネス理論追究」にとって大きな貢献であり、「ポライトネス理論研究」を言語学に留まらず、社会心理学、その他の分野の興味をも喚起し、これらの分野との交流の橋渡しとなるものにもした大きな要因になっていると言っても過言ではないのである。

ただ、この「フェイス」についての 2 つの捉え方の違いは、現在も依然として並行線をたどっており、B&L の「フェイス」の概念を問題視する研究者の中からは、「様々な文化、下位文化、言語における相互作用の事例に適用できる理想的で普遍的な科学的概念としての (イン) ポライトネスは、ありえない (Watts, 2003: 23 (筆者訳))」と主張し、ポライトネスを「論証的概念 (discursive concept)」として捉えるべきだとする主張まで現れた。B&L の理論において、普遍理論構築のためのパラメーターとして、操作的に定義された「フェイス」の概念を、「文化相対性」の観点から問題視し、B&L の理論の普遍性を批判するような捉え方をすると、「普遍性」自体が成り立たないものになってしまうのは明らかで、結局は、このような結論に至ってしまうであろうことは、その批判が始めた当初から自明のことであったと筆者は考えている。この立場に準ずる研究は、個別事例を延々と記述する方向へと進んでいるように見える (Eelen, 2001; Watts, 2003; Locher, 2004; Mills, 2003) (仮に論証的アプローチ派 (論証派) と呼ぶ¹¹⁾)。一方、「フェイス」という用語はどちらかく、その「概念」を柔軟に解釈し、それぞれ独

宇佐美：ポライトネス理論研究のフロンティア—ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論—

自の解釈や概念などを追加して、B&L のポライトネス理論の弱点を補い発展させる形の論を展開しているのが、Bayraktaroglu (1991), Janney & Arndt (1992), Jary (1998), Meier (1995), Usami (1994, 1999, 2002a, b, 2006a, b, c), 宇佐美 (2001a, b, 2002, 2003) である (仮に普遍理論追究派 (普遍理論派) と呼ぶ)。

(2) 「ポライトネス (politeness)」という用語・概念を問題とするもの

「フェイス」という概念・用語には、平行線を辿る見解の相違が見られるが、「ポライトネス」という用語自体については、(1) で述べた論証派も、普遍理論派のどちらも、狭義の意味では、最適な用語とは言えないとする見方が多い。その理由は、常識的意味との混乱が生じやすいこと、B&L の言うポライトネスの意味を拡大解釈した、対人コミュニケーションの普遍理論としては、当然含めるべき「インポライトネス」が考慮されていないニュアンスが強いこと (実際、B&L では、インポライトネスについては、あまり触れられていない)、その他様々な観点から、この用語の問題やそれに代わる概念や用語の必要性が指摘、提案されてきた (上記にあげたそれぞれの研究者の著作を参照のこと)。その一例に、「分別ある行動 (politic behavior)」とポライトネス (politeness) の区別 (Watts, 1992) 等がある。また、Watts (1992) で初めて提示された「第一種ポライトネス (first order politeness)」、「第二種ポライトネス (second order politeness)」の区別は、Eelen (2001) が継承し、いろいろなポライトネス理論の批判的分析の枠ともしている¹²⁾。その捉え方は、さらに、Watts (2003) で深められたとある (Locher & Watts, 2005)。(これらの捉え方の問題点については、3.1 を参照) その後、Watts らは、「Relational Work」(Watts, 2003; Locher & Watts, 2005) という概念をポライトネスに代わる概念として提出しているが、それ自体の概念が明確であるとは言い難く、その主張は、結局は、ポライトネスの「普遍理論追究」とは、離れていく傾向を見せていている。

一方、普遍理論派の提出している概念や用語には、「社会的ポライトネスと対人ポライトネス (social politeness vs interpersonal politeness)」、「タクト (tact)」

(Janney & Arndt, 1992), 「適切性 (appropriateness)」、「修復行動 (repair work)」(Meier, 1995), B&L と同じく Goffman (1972) から借用した「相互作用的不均衡 (interactional imbalance)」(Bayraktaroglu, 1991) をキーワードとするものなどがある。ひいては、B&L のポライトネス理論は、交換理論 (Exchange Theory) の一部として位置付けられるかもしれないという見方 (Brown, R., 1990) なども提示されていた。また、日本語においても、「配慮表現」、「言語的配慮行動」(生田, 1997) という言い方や、概念の捉え方としては、politeness の一般的な翻訳語である「丁寧さ」という用語は不適切で、「対人配慮行動」(宇佐美, 1993b, 2001a, 2003) として捉える必要があることが指摘されている。DP 理論も実質的には、よりマクロな視点を加え、インポライトネスも統一的に扱うなど、対人コミュニケーション論の様相をより強めているが、現段階では、B&L の理論がきっかけとなって展開したものであることを正当に明示するため、また、むやみな混乱を避けるために、「ディスコース・ポライトネス」という形で、「ポライトネス」という用語を残している。

(3) B&L のフェイス侵害度の見積もりの公式 $W_x = D(S, H) + P(H, S) + Rx$ が、文化や状況によって彼らの予測する通りにはならないという批判

この公式を検証しようとした研究、及び、その結果に基づくこの公式や B&L の理論に対する批判、さらには、そのような批判自体の問題点については、以前まとめてある (Usami, 1999, 2002a)。ここで、改めて指摘しておきたい最も重要な点は、この公式が普遍理論の一部として提唱されているからといって、それが、あらゆる文化におけるそれぞれ個性の異なる個人同士の具体的で個別の言語行動の「すべて」を説明すべきだ、というような捉え方をしないということである。そのような観点で理論というものを捉えるならば、どんな理論でも、1, 2 の反例を見つけるのはたやすいことである。また、その 1, 2 の反例をもってして、ある程度体系的に構成された理論を全否定するのは、妥当とは言えない。全否定は、当該の理論全体より完成度の高い代替理論を提

出するのない限り、建設的とは言えない。また、B&L自身は、この公式については、自然なやりとりの一部のみをコード化することが難しいことを理由に、当初よりこの公式を数量化して検証することの妥当性を疑問視し、むしろ、定性的分析との相互補完の必要性を指摘している(Brown & Levinson, 1987:21-22)。

しかし、この公式の大枠の検証のために、実証的研究の結果を蓄積していくということは、質問紙調査等の限界を踏まえたとしても、理論の妥当性の部分的検証という意味で意義あることと筆者は考えている。この公式の部分的な修正案に関しては、主に定量的研究に基づいて議論がなされているので紹介する。B&Lの公式の妥当性を検証しようとする研究には、「依頼行動」など特定の発話行為について、主に、質問紙調査の形で行われたものが多い。結果は、B&Lの公式を支持するものとしないものと多様性を見せている。ただ、様々な言語で行われ、同じ言語についても、研究によって質問紙における問い合わせなどの内容自体が異なる様々な研究から、相反する結果が出ていることは、ある意味当然とも言える。むしろ、これらの研究結果の妥当性の判断には、厳密には、各々の研究の質問紙調査の内容の妥当性の検証まで必要になってくると言え、問題は複雑である。そういう意味で、これらの研究結果は、B&Lの理論の是非の結論を下すというよりは、その問題点を探り、今後、どのような新たな方向性があるかという建設的な視点に結びつけるという観点から概観されるべきである。

ここでは、そのような観点から、これまでの結果を簡略化してまとめる。B&Lの公式におけるP要因の影響については、比較的B&Lの公式を支持する結果が多く、また、Rx要因についても、次に安定した結果が出ている。最も相反する結果が出ているのはD要因である。あまり親しくない人に対してよりポライトになるという結果と、近く好きな人に、よりポライトになるという相反する結果が出ており、そこから、「情緒(affect)」や、「好み(liking)」も要因に加える必要があるのではないかという指摘もあった(Slugoski & Turnbull, 1988; Brown

& Gilman, 1989)。例えば、Forgas(1999a, 1999b)は、ムードがいかにポライトネスに影響するかについての実験で、「悲しみのムード」にある人は、よりポライトになるという結果を報告した。ここで、「ムード」の要因を公式に加えることを考える前に、第2の実験を計画し、悲しいムードにある人は、概して、自分のパワー要因を低く捉えがちだという結果を得た。つまり、悲しみのモードにある人は、B&Lの公式のP要因が低くなるため、よりポライトになるのだと解釈することができ、結局は、B&Lの公式を支持していると捉えたのである。つまり、これらを総合的に考えると、P,D,R要因は、より高次の抽象度の高い「主要因」として位置付け、情緒や好み、ジェンダー、人種、職業などのより具体的な社会的要因の影響は、当該の状況に応じて、この3つの主要因に吸収・集約されると考えられるが、妥当である(Holtgraves, 2005; 宇佐美, 2002)。筆者も、当初からこれまでの間、この公式には、他の要因を加えないほうが、公式としての柔軟性と汎用性が保てるとして、修正はしない立場をとってきた。しかし、DP理論の最新版では、新たに「話し手自身のフェイス保持欲求度」と「聞き手のフェイス保持尊重度」の兼ね合いを考えて、全体のフェイス侵害度が見積もられるという観点、さらには、当然性(権利と義務)¹³⁾の概念、傍聴者の有無の影響、などをR要因の下位要因として位置付ける。

(4) B&Lが提示したポジティブ・ポライトネス・ストラテジー、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーに両面性があることや、そのFT度に応じたストラテジー選択の優先順や具体的ストラテジーの間に矛盾があるという点

B&Lが提示した「ポライトネス・ストラテジーの選択を決定する状況」、すなわち、フェイス侵害度が大きいほうから順に、FTAを行わない、オフ・レコード・ストラテジー、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー、直接的言語行動というストラテジーが、選択されやすいという指摘についても、「必ずその順番になる」というよりは、そういう傾向にあるという大まかな予測として捉える必要がある。こ

れは、(3)で述べたフェイス侵害度の見積もりの公式におけるPDRの要因の影響の捉え方と同様である。また、「具体的ストラテジー」の整理も必要だと考えるが、それらは、理論の具体的細部となるので、本稿では、扱わない。しかし、今後は、多くの研究者が協力して諸言語のポライトネス・ストラテジーの知見を蓄積していく必要がある。また、それは、B&Lの理論で提示されたものに限定する必要はない。また、ある発話が、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとしても、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとしても機能することもあるという指摘(川口・蒲谷・坂本, 2002等; 宇佐美, 2001a, 2002)は、敬語を有する言語とそうでない言語双方において指摘されている点が、重要である。特に、日本語のような「敬語体系」が発達した言語では、「言語形式の丁寧度」と「内容の述べ方」の双方で、ポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスの両方が表せるという「ポライトネス表示の多面性」がある。DP理論では、今後その点を、より明確に扱う必要があると考えている。ただ、本稿では、あくまで「理論」としての展開の大きな方向性にかかわる点を、まず取り上げる。

(5) B&Lの定義したポライトネスを個別言語の敬語使用の原則と同一視するという誤解に基づいた対照研究と、その結果導き出された言語文化による相違点を、B&Lのポライトネス理論への反証としようとするもの

さすがに、この類の研究は少なくなったと言える。研究自体が減ったというよりは、個別言語の敬語体系に興味がある研究者は、その興味と目的にあった場で研究を発表し、その結果をむやみにB&Lのポライトネス理論の「普遍性」への「反証」とするという形で、「ポライトネス理論」研究にかかるてくるということは少なくなってきたと解釈してもよいだろう。そしてそのことも、先に述べたような「ポライトネス研究」としてこれまで混在していた目的を全く異なる研究が、別の方向へ向かっていることの表れのひとつとも捉えられる。しかし、あらゆる研究の発展のためには、隣接分野間の相互交流が必須と考える筆者からすると、2つの

アプローチが単に乖離するだけであるのは望ましいことは言えない。しかし、一方で、この30年間のように、噛み合わない議論をそのままの形で続けることも、あまり生産的とも思えない。必要なのは、論証派、普遍理論派を問わず、先行研究の主張を正確に踏まえた上で、新しい議論を組み立て、新しい知見を提供することができる研究の「比率」が、この分野で増加することである。その兆候のひとつとして、1990年代に展開された、B&Lの理論の曲解に基づいたまま「日本語の敬語は、B&Lの理論では説明できない」とする論(Ide, 1989; Matsumoto, 1988等)とは逆に、B&Lのポライトネス理論の考え方方が、個別言語の「敬語論」にも示唆する点が多いとする捉え方が出てきている(滝浦, 2005)。このような研究の今後の展開は、「個別言語のポライトネス記述研究」と、「ポライトネスの普遍理論研究」の乖離をつなぎとめる重要な鍵を握ると思われる。但し、これは、単に、B&Lの理論を援用して個別言語のポライトネスを説明するということに留まつては、意味がない。個別言語研究からの知見を世界に提供することによって、他の諸言語の研究にも何らかの新たな視点を提供し、さらには、そのことによって、「ポライトネスの普遍理論研究」にも貢献する。そのような展開を見せてこそ、初めて本当の意味で、いわゆる「ポライトネス研究」分野を、「ポライトネス記述研究」と「ポライトネス理論研究」が同じ土俵の上で議論し、相互に刺激・発展させるという「本来の在り方」にしていくことにも貢献できると言えるだろう。世界への発信も含めて、今後の「日本語の敬語論」の諸説のさらなる展開にも、期待するばかりである。

以上、これまでB&Lのポライトネス理論に対してなされた批判の主なものを改めてまとめた。このように、90年代にはB&Lのポライトネス理論に関して、その「フェイス」という鍵概念自体を問題とするものから、「ポライトネス」という概念や用語を問題とするもの、フェイス侵害度の公式を検証しようとするもの、その他、様々な観点から研究が行われた。その批判も、B&Lのポライトネス理論の正確な理解に欠ける誤解に基づくものから、B&L

のポライトネス理論の弱点を克服するポライトネスの普遍理論の確立にむけて、建設的な貢献が期待できる視点を含むものまで、様々であった。そして、2000年代に入ってからは、徐々にその多様な視点や意見の相違から、これまで漠然と「ポライトネス研究」とひとくくりにされてきた研究の相違点が浮き彫りにされ、研究志向は2極化する様相を呈している。混沌としたこの分野の特徴とその動向は、「ポライトネス記述研究」と「ポライトネス理論研究」を明確に分けて考えてみると、多少は分かりやすくなるだろう。以下では、この2つのアプローチそれぞれの動向について簡単にまとめる。その上で、「ポライトネス理論研究」のひとつとして展開してきている、DP理論の最新構想の一部を最後にまとめる。

3. ポライトネス研究における「論証的アプローチ」と「普遍理論追究アプローチ」

何が「ポライトネス理論研究」への建設的指摘なのかを考え、そのポイントを掘るために、昨今のポライトネス研究の流れにおける「論証的アプローチ」と「普遍理論追究アプローチ」について、簡単にまとめておく。

3.1 ポライトネス研究への論証的アプローチ

先にも述べたように、「論証的アプローチ」の代表的なものには、Eelen(2001), Watts(2003), Locher & Watts(2005), Mills(2003), Locher(2004)がある。これらの中にも当然細部の捉え方の違いはあるので、ここでは、Eelen(2001), Watts(2003)を中心に、「ポライトネスの普遍理論追究」にかかわる部分の主張とその問題点をまとめる。まず、「第一種ポライトネス」「第二種ポライトネス」の区別についてである。Watts(1992:3)によると、「第一種ポライトネス」とは、「特定の社会文化的集団によって、語られている様々なポライトな行動（筆者訳）」を指し、「第二種ポライトネス」とは、「社会的相互作用の総合的な理論の中でのみ価値を持つ、より専門的な言語学的、科学的概念である（筆者訳）」と言う。そして、第一種ポライトネス、つまり、「いわゆる一般の人がポライトネスをどう捉えているか」という「常識」を、「第二種ポライトネス」、すなわち、「ポ

ライトネス理論研究」と混同し、それに持ちこんではいけないと主張する。もっともである。さらに言えば、あまりにも当然すぎて、なぜ、それをわざわざ持ち出すかと思うほどである。筆者は、この区別は、解釈の仕方によるが、ポライトネス研究発展のためには、むしろ、かえってさらなる議論の混乱を引き起こすことにもなりかねず、不要であると考えている。「ポライトネス理論研究」のみならず、「ポライトネス記述研究」であれ何の研究であれ、それが「研究」である以上、研究対象についての単なる「常識」や、「一般の人がどう考えているか」ということと、「その科学的概念」とが、同一であるはずがない。たとえ、彼等の言う第一種のポライトネスを「記述する研究」であったとしても、それが「研究」としての条件を満たしている限り、そこから導き出される結論やそれを解釈する概念や説明は、ある程度抽象化された「科学的概念」としての「ポライトネス」になんらかの貢献をすべきであり、結局、彼等いわくの第二種のポライトネスになる。もし、第一種、第二種という分け方に、強いてあわせて言うならば、そういう言い方ができるということであるが。筆者は、これをあえて取り上げて分けて論じることには、メリットがないどころか、かえって無用な混乱を助長しデメリットにさえなると考えている¹⁴⁾。ただ、現実には、研究者によっては、この区別があいまいにされていたり、混同されていることも確かである。そのため、そういう研究者の注意を促すために、便宜的にこの概念を導入したのかと思っていたが、読み進めると、そうでもないらしい。Watts(1992)は、「第二種ポライトネスは、明確に第一種ポライトネスとは、区別された上で、別の名称を与える必要がある。（筆者訳）：同書4」として、B&Lのポライトネス理論も含めて、その区別がなされているのは、Watts(1992)の *polite vs politic behavior* と、Janney & Arndt(1992)の *emotional vs emotive communication* だけだと含意する。Janney & Arndtが、その当然の区別をした上で彼等の論を展開しているということには同意できるが、B&Lが、そうではないとする捉え方には、疑問を感じざるを得ない（むしろ、Janney & Arndt(1993)は、B&Lの

理論が、科学的ポライトネス理論として今後、その妥当性を検証していくことを可能にするペースラインとなる条件を満たしていると指摘している）。また、Watts自身の論の展開と、それを引き継いでいる Eelen(2001)の論の展開を見ると、結局は、彼ら自身が、この二種類のポライトネスを混同しており、科学的概念としての第二種ポライトネスを確立しきれていないとしか思えないような循環論に陥っている。いわゆる論証派が問題視する問題は、皮肉にも、彼等自身の問題であることを露呈しているのである。（同様の指摘は、Davies(2005)でもなされている。）また、Eelen(2001)には、論証的アプローチの利点を主張するためか、ポライトネス研究における定量的アプローチ、統計処理を用いた研究への批判もあるが、これも定量的分析を表面的にしか理解していないとしか思えないような初步的な誤解に基づく指摘が多い（これについても、Davies(2005)で指摘されている）。また、他にも、論証的アプローチでない研究は、すべて不自然な環境下における実験や質問紙調査に基づいていて、自然の会話のやりとりを詳細に見ていないことを前提とするような指摘もある（Kasper, 2006）。しかし、条件を統制しつつ「自然会話」の実際のやりとりを定性的にも分析している研究は、西欧よりも、むしろ日本のほうで、着実に進められてきた感がある。（李, 2004; 李・木林他, 2006; 三牧, 2002; 宮武, 2007等；その他概観は、宇佐美, 2001a 参照。）

Locher & Watts(2005)では、フェイス軽減行為を核とする B&L のポライトネス理論が改めて批判され、それに代わる概念として、他人と関係を交渉することに力をそそぐ「Relational Work」という捉え方が、論証的に (discursive) に「ポライトネス」を捉えるのに有用であるとして、提案される。ただ、彼等の B&L の批判には、「B&L の理論はポライトネスの理論ではなくフェイスワークの理論である：Locher & Watts 2005:10」というような意味不明の指摘がある。彼等は、「普遍理論追究アプローチ」の研究者からは、B&L の理論の「長所」と捉えられている「フェイス」という概念を抽象化して「媒介変数」として機能させることによって、実際の言

語使用と「力関係」や「社会的距離」、「場面」などの重要な社会的変数の影響を反映させて、「ポライトネス」を操作的に捉えることを可能にした、という点への理解を全く示さない。「それは、ポライトネスではなく、フェイスワークである」というような捉え方しかできない。一方、それでは、彼等が「論証的概念」であるとする「ポライトネス」というものが何であるのか、また、彼等のいう「第二種ポライトネス」において、それはどういう位置付けとなるのか、彼等の言う「ポライトネス」とは、どのような「科学的概念」なのかについては、明確には示されていない。むしろ、普遍的、科学的概念として「ポライトネス」を規定することは不可能であると主張することによって、第二種ポライトネスの存在を否定し、結局、ポライトネスを第一種、第二種に分けて考える必要があるという先の主張と矛盾をきたしている。

筆者は、むしろ、ポライトネス研究に関して、分けて考えなくてはいけないのは、第一種、第二種のポライトネスの区別ではなく、「様々な文化における多様なポライトネスの実現の記述を深めていくことによって、ポライトネスとは何かということを明らかにすることを目的とする」のか、或いは、「その多様なポライトネスの実現の基にある「動機」と、対人配慮行動の「解釈」の原則としての「ポライトネスの普遍理論」の構築を目的とする」のかの区別であると考える。つまり、その原則 (principles) の研究なのか、その実現 (realization) の記述研究なのかという「ポライトネス記述研究」と「ポライトネス理論研究」の区別である。前者は、各個別言語におけるポライトネス、敬語体系や敬語運用の研究、それらの比較文化的研究などであり、後者は、言語文化によって多岐・多様にわたるポライトネスの「実現 (realization)」の基にある動機と実現された行動の「解釈 (interpretation)」のプロセスを、統一的に説明、解釈、予測しようとする「理論」に重点をおいた研究である。

両方のアプローチそれぞれに存在意義と長所があることは言うまでもない。また、「ポライトネス理論研究」も、様々な言語・文化における「ポライ

トネスの実現の多様性」を説明しうるものを目指さなければならぬ。そういう意味で、筆者は、この二つの異なるアプローチの研究が乖離するのではなく、その目的が異なることを自覚した上で、相互に貢献しあうことが必須であると考えている。

3.2 ポライトネスの普遍理論追究アプローチ

早くから、B&Lのポライトネス理論を高く評価する研究者は多かつたが(Brown,R.,1990; Holtgraves, 2002; 宇佐美, 1993b), 批判のほうは話題にのぼりやすく、B&Lの理論の短所を克服し、長所を発展させるというようなアプローチが、主流として取り上げられてこなかった感がある。しかし、先にも述べたように、以下にあげる研究者たちは、その用語や概念に違いはあるが、その内容や主張から、基本的に、「対人コミュニケーション」の原則としての「ポライトネスの普遍理論」の追究の意義を認めるアプローチを実践していると捉えられる。以下に、そのエッセンスをまとめた後、何が「ポライトネスの普遍理論研究」にとって建設的指摘なのかを考える。

Janney & Arndtは、かなり早い段階から、ポライトネス、コミュニケーションに関する研究を実践しており(Janney & Arndt, 1992), 生物学的、心理学的、社会心理学的観点から、幅広くコミュニケーション全般について論じている。「社会的ポライトネス」と「タクト」を分けて考えるなど、様々な興味深い知見を提供してくれているが、ただ、「ポライトネス」に限定して体系化するという意味では、B&Lほどにまとまっているとは言えない。Meier(1995)は、「ポライトネス(politeness)」という用語のもたらす混乱を指摘し、それを「適切性(appropriateness)」と定義することによって、問題の多くが解決できるのではないかと指摘する。また、「リペア・ワーク(repair work)」という概念を提出して、「談話レベル」からの分析の必要性を主張している¹⁵⁾。しかし、リペア・ワークについては、その概念の一例が説明される程度で、それらを体系的にまとめるところまでには至っていない。Jary(1998)は、関連性理論(relevance theory)の枠組みで、ポライトネスを捉えることを主張し、聞き手の側の解釈の視点を取り入れるという意味で、DP理論と

も通じるところがある。しかし、逆に、話し手側からの観点に後退が見られ、結局、ポライトネス理論として、体系的なものにはなっていない。Bayraktaroglu(1991)は、B&Lの理論に欠けている、より長い談話をダイナミックに捉える視点を重視し、Hewitt & Stokers(1975)の「フェイス配慮」の概念を参考に、B&Lのポライトネスで定義されている、フェイスを侵害する前のフェイス侵害度軽減行為としてのポライトネスとともに、フェイスを侵害した後に、それを埋め合わせる行為もポライトネスに含めるとした。そして、Goffman(1972)における「不均衡の修正(correcting the disequilibrium)」という概念を参考に、「相互作用上の不均衡(interactional imbalance)」という概念を提出している。さらには、相手への「フェイス侵害行為」だけでなく、相手のフェイスを満足させる「フェイス充足行為(face-boosting acts)」を加え、それぞれある発話行為が、話し手と聞き手それぞれの「フェイス侵害行為」「フェイス充足行為」のどれにあたるかという観点から、4通りに分類し、それぞれに該当する事例を解釈している。また、よりマクロな観点の「バランス修復活動(balance restoring activities)」という概念も導入している。B&Lのフェイスの概念を有効だとしてベースにしつつも、Goffmanのよりマクロな視点を生かし、B&Lの理論を談話レベルに拡大しようとしたもので、DP理論と共に多くの、また、先にあげた他のものに比して、より体系的にまとめられていると言え、その試みは高く評価できる。しかし、残念ながら、少なくとも例として扱われている事例は、ローカルな(1,2のターンのやりとり)のものに留まっていることと、興味深い捉え方を提出しながらも、発話行為のタイプをマトリックスにまとめることによって、分断的で静的な分類に留めてしまつており、ダイナミクスの体系を一元的に集約せざるところまでは至っていない。宇佐美(2001a, 2002, 2003, 2006a, b, c)は、同様に、「フェイス」の概念は維持しながらも、1, 2のターンのやりとりを超えるより長い談話レベルでグローバルにポライトネスを捉えるために、新たに「基本状態」というパラメーターを導入し、ポライトネスの効果

を相対的に捉えることを主張した。そして、ポライトネスを、話し手側の見積もる「ポライトネス・ストラテジー」と、聞き手側の解釈としての「ポライトネス効果」とに分けて論じることの必要性を初めて明確に主張し、「相対的ポライトネス」の理論として、「ディスコース・ポライトネス理論」を提唱した。また、新たに、よりマクロな観点からの「フェイス均衡原理(Face-balance principle)¹⁶⁾」という概念を提出している(宇佐美, 2008 予定)。

4. ポライトネス理論研究の課題

ロビン・レイコフによって語用論的関心事として取り上げられ、リーチによって語用論的「公理」としてまとめられ、B&Lによって、より包括的な理論として体系化されたと言える「ポライトネス研究」は、上記のように、今世紀に入って、個別言語、比較文化的視点を中心とする「ポライトネス記述研究」と、「適切性(appropriateness)」、「対人配慮(consideration)」、「バランス修復活動(balance restoring activities)」、「ディスコース・ポライトネス(discourse politeness)」のように、研究者によって核とする概念や用語を変えながらも、人間の社会的相互作用をいかに体系化するかという観点から、B&Lが銘打った「言語的ポライトネス(linguistic politeness)」には留まらない「対人コミュニケーション理論」へと展開する「ポライトネス理論研究」とに、2極化しつつある。論証的アプローチ派が、「ポライトネス」という用語や概念や現象の共通理解の必要性を主張したあげく、その限界を認めて、個別事例の記述を極める方向に進んでいるのに対して、普遍理論追究派は、B&Lによって「ポライトネス」という言葉で表わされた概念や現象を超えて、言語行動に焦点をおきながらも、「人間の社会的相互作用」、「対人コミュニケーション」の理論化に迫ろうとしつつある。

ただ、並行線をたどろうとする、或いは、分岐しようとしているかに見えるこの2つのアプローチには、ひとつだけ共通点がある。それは、Thomas(1995)によって、わかりやすく述べられているように、「ポライトネス」は、「言語形式」それ自

体に内在するものではない」という見方である(Bayraktaroglu, 1991; Eelen, 2001; Holtgraves, 2005; Janney & Arndt, 1992; Jary, 1998; Locher, 2004; Meier, 1995; Mills, 2003; Usami, 1994, 1999, 2002a, b; 宇佐美, 1993a, b, 2001a, b, 2002, 2003; Watts, 2003)。論証派は、ポライトネスは、「言語形式」それ自体に内在するものではないが故に、「様々な共同体で、何がポライトか失礼か等々を論証的に議論していく必要があり、「普遍理論の観点からのポライトネス」という概念¹⁷⁾を維持することには、ほとんどメリットがない」と結論づける(Locher & Watts, 2005)。しかし、普遍理論派は、「ポライトネスが言語形式それ自体に内在するものではないからこそ、敬語を有する言語とそうでない言語、西欧の言語と非西欧の言語等々の言語構造上の違いにもかかわらず、いわゆる「ポライトネス」を生み出す動機と言語行動の解釈について、諸言語に共通する原則としての「ポライトネスの普遍理論」が構築できる」と考えるのである。この捉え方の違いは、前者が結局は、「ポライトネス」という言語形式(語彙)にとらわれていることを物語っており、この2つのアプローチの分岐点になっている。但し、筆者は、それでも、「ポライトネス研究」のあるべき姿としては、この2つのアプローチは、お互いの目的や方法論の違いをしっかりと自覚し、尊重しあった上で、相互に知見を共有しながら、相互に発展していくべきであると考えている。この分岐点にあるかに見える研究動向における接点の重要性を認識し、この2つのアプローチの乖離を踏みとどまらせる研究が増えることを期待するばかりである。

ここでは上記のポライトネスの普遍理論追究アプローチの研究成果、主張の中から、筆者が重要だと思うものを以下にまとめ、次節で、それらの点を克服する形で発展させつつあるDP理論の新構想の概略を示す。

普遍理論追究派が共通して主張していることは、「ポライトネスについての規範、すなわち、いつどのような状況で、誰が誰に対して、どのような言語行動をすべきかということは、文化によって様々な多様性を見せるが、話し手が、そのような規範と自

分の意思を考慮して、どのような言語行動を選ぶかということの背後にある動機と、実際の言語行動の選択のメカニズムは、普遍的である」ということである。そうであるとするならば、普遍理論追究派の目的は、「ポライトネスの背後にある動機とそれを実現する言語行動のメカニズム」を体系化することにある。また、Jary(1998)を除いて、ほとんどの研究者が指摘していないが、ポライトネスの「背後にある動機」と同様、筆者が重要なと考えるのが、「実現されたポライトネスの解釈」の問題である。この点も含めると、上記の研究者らの研究で指摘されたB&Lの理論の問題点の中で、今後の課題として筆者が重要であると考えるものは、以下の10点である。

- (1) ポライトネスは、その逆ともいえるインポライトネスとともに、統一的に扱われるべきである。
- (2) (1)を考えると、「ポライトネス理論」という位置付けも、「ポライトネス」という概念の定義も拡大する必要がある。また、その概念に応じた新しい用語を提出する必要があるかも知れない。
- (3) 「人間の対面的相互作用」の原則の理論化のためには、1,2のターンのやりとりを超えた、より長い談話レベルの相互作用を対象とする必要がある。
- (4) (3)は、おのずと、「(自然)会話データ」を主要なデータとすることの重要性を示す。
- (5) 相手の「フェイス保持」だけでなく、自分の「フェイス保持」の観点も、より明確に理論に組み込む必要がある。
- (6) ポライトネスは、フェイス侵害行為(Face Threatening Act:FTA)のFT度軽減行為としてだけでなく、「フェイス充足行為(Face Boosting Act:FBA)」も加えて、よりマクロな観点からも捉える必要がある。
- (7) 発話をを行う際に、発話をやわらげるFT軽減行為としてだけでなく、FTAを行ってしまった後に、それを埋め合わせる言語行動も円滑な人間関係の確立・維持のためのストラテ

ジーとしての「ポライトネス」として扱う必要がある。

- (8) また、長い会話において、一方の話者の、相手に対する「フェイス侵害行為」のFT度軽減行為が足りない、或いは、全くなかった場合に、同じ会話の中で、今度は相手が、同程度と見積もる「フェイス侵害行為」をあえて行って、「フェイスの均衡」を保とうとすることがあるという現象も統一的に説明することが、インポライトネスも含むより包括的なポライトネス理論には必要である。
- (9) さらには、関係が継続する相手との会話におけるやりとりにおいては、一回の会話だけではなく、より長いスパンのコミュニケーション関係を想定し、ひとつの会話におけるフェイス侵害度の不均衡を、次の会話において解消することも可能であるという、よりマクロな視点も取り入れる必要がある。それが「フェイス充足行為」の動機¹⁸⁾ともつながる。
- (10) 「ポライトネス効果」は、聞き手の側からの認知である点を明確にし、「実現されたポライトネスの解釈」の問題として、聞き手の解釈過程を理論に組み込む必要がある。

次に、提示するDP理論の新構想は、上記(1)～(10)すべてに対応するものである。但し、(2)の新しい「用語」の提出については、これまでの研究史を踏まえ、DP理論がそこから展開してきたものであることを正当に示すため、また、混乱を避けるためにも、「ディスコース・ポライトネス」という形で、「ポライトネス」という用語を維持する。しかし、今後は、マイナス・ポライトネスとしての「インポライトネス」の部分の研究も拡大・強化していく。また、(10)については、それだけで膨大な課題であるため、今後は、多くの研究者が協力して深めていくべき課題であると考えている。ただ、次節では、聞き手の解釈過程が、「DP理論」の中でどのように位置付けられるかということのみを示す。それは、広い意味の、人間の言語使用の理解と産出の両方を含むコミュニケーションのメカニズムの中で、ポライトネス、すなわち、相手のフェイスへの配慮の観点

が、自分自身のフェイスの保持の欲求とともに、いかなる役割を果たしているかということの位置付けを示すものである。

また、DP理論の新構想では、宇佐美(2001a, 2002)で提示した以下の問題点¹⁹⁾への対応についても述べる。

- (1) 敬語を有する言語においては、従来のように、文レベルにおける「言語形式の丁寧度」だけの問題としてポライトネスを捉えるという発想を転換し、実際の言語使用における「談話レベル」の語用論的ポライトネスという観点からポライトネスを捉え直す必要がある。
 - (2) 敬語を有さない言語においては、敬語使用の原則による語用論的制約に相当するような「社会言語学的規範や慣習に従った言語使用」にも、もっと着目する必要がある。
 - (3) 敬語を有する言語、そうでない言語双方において、ポライトネスは、「社会言語学的規範や慣習に従った言語使用」と「話者個人の方略的な言語使用」、また、両者の相互作用も考慮して、談話レベルで捉えていく必要がある。
 - (4) 敬語を有する言語においては、言語形式と発話内容がポライトネスに果たす役割を、より細やかに分析していく必要がある。また、敬語のない言語においても、ひとつの発話が、ポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネス両方の機能を持ちうることについて分析を深める必要がある。
 - (5) 相互作用における、話し手と聞き手双方の観点を、より明確に理論に取り入れる必要がある。
- ## 5. 「ディスコース・ポライトネス理論」の新構想の概要
- DP理論は、よりマクロな観点からは、人間の言語使用(産出と理解)、すなわち対人(言語)コミュニケーションのメカニズム解明を念頭において、特に、「ポライトネス(インポライトネス)」の観点から、その原則を体系化しようとするものである。より具体的には、「ポライトネス」を「円滑な人間関係を確立・維持するための対人コミュニケーション」

として、談話レベル、グローバルな観点から捉えた上で、ローカルな観点からは、話し手側の言語行動と、聞き手側のその解釈との一致・不一致という観点を導入する。また、いわゆるインポライトネス(マイナス・ポライトネス)も同一の枠組みで扱い、その全体のメカニズムを、ミクロ・マクロ両方からの「フェイスワーク」という観点から、体系的に説明しようとするものである。

アプローチの方法としては、どこかにあると想定される「真実」を解明し、記述していくという捉え方ではなく、明確に存在する「事実」をしっかりと捉えて記述し、その事実をいかに体系的に説明できるかという観点から、科学的概念や用語を援用する。そのひとつのが「操作的定義」²⁰⁾である。また、その体系は、なるべく少ない原則で、できるだけ多くのことを説明できるものを理想とする。

本稿では、一連の実証的研究(宇佐美, 1993a, 1995, 1997, 2001b; Usami, 1994, 1999, 2002a)の結果を踏まえた上でまとめられた「ディスコース・ポライトネス理論」(宇佐美, 2001a, 2002, 2003; Usami, 2006a, b, c)に、新たに具体化した点を加えて新構想を紹介するに留める。

5.1 DP理論の特徴

まずは、簡単にDP理論の特徴をまとめておく。(2)の「基本状態」、(4)の「見積もり差」については、新たにより具体的に表した。

- (1) ポライトネスを、「言語行動におけるいくつかの要素がもたらす機能のダイナミクスの総体」として談話レベルから捉える。そして、そのように総体として捉えたポライトネスを「ディスコース・ポライトネス」と呼んで、「文/発話レベル」のみから見たポライトネスと区別する。
- (2) 「基本状態」という概念を導入し、(1)で説明した総体としての「ディスコース・ポライトネス」を、当該談話の「基本状態」という「媒介変数(parameter)」として捉える。それとともに、同じ活動の型における数多くの「談話」において、ディスコース・ポライトネスを構成する各々の要素の「当該談話における構成

- 比率」の平均的なものや、「各々の要素の生起率」の平均的なもの、「典型的な談話展開パターン」などをも、「それぞれの言語行動や談話展開パターンの基本状態（デフォルト、典型）」として捉える。
- (3) ディスコース・ポライトネス理論では、話し手が見積もる「ポライトネス・ストラテジー」と、話し手が実際に行った言語行動のフェイス侵害度についての話し手と聞き手の「見積もりの差：(De 値)」によって引き起こされる「聞き手側の認知」としての「ポライトネス効果」を区別して考える。
- (4) 「ポライトネス効果」は、次の3種の「話し手と聞き手の見積もり（期待）差」のいずれか、或いは、すべてによって、相対的に生まれてくると考える。①話し手が実際に行った言語行動のフェイス侵害度についての「見積もり差」、②「フェイス侵害度の見積もりに応じて選択されたストラテジー」についての見積もり（期待）差、③「談話の基本状態」が何であるかについての見積もり（期待）差。
- (5) 話し手と聞き手の種々の見積もり（期待）差のずれが、「許容できるずれ幅($0\pm\epsilon$)」内に収まる場合の、ある有標行動（一発話レベル・談話レベル）の「ポライトネス効果」は、当該の談話やそれを構成する要素それぞれの「基本状態」を基にして、そこからの「有標行動の離脱の度合い（有標性）」に応じて相対的に生まれてくるものであると捉える。
- (6) 相対的に生まれる「ポライトネス効果」は、話し手と聞き手の3種の「見積もり（期待）」のいずれか、或いは、すべての「ずれ」の方向と大きさによって、「プラス効果」、「ニュートラル効果」、「マイナス効果」のいずれかになる。「プラス効果」、「マイナス効果」は、聞き手が、心地よいか、不快かというポライトネスの観点であるが、「ニュートラル効果」とは、「ポライトネス効果」の観点からは、ニュートラル、つまり、特に心地よいというわけでもなく、不快、失礼に感じるわけでもない、

ということである。この場合、その「有標行動」は、「話題転換」、「ある主張の強調」、「注意喚起」などの「言語的談話効果」（宇佐美, 2001a, 2002）を生んでいると考えられる。

- (7) ディスコース・ポライトネス理論は、この「相対的効果」という捉え方を理論の核とする。

5.2 DP 理論の今後の展望

今後は、DP 理論の「社会的相互作用としての対人コミュニケーション論」における位置付けを、より明確にしていく。また、細部を具体化したものを見直していく予定である。まず、ここでは、継続する人間関係を想定する場合の最もマクロな観点からの位置付けを提示しておく。

DP 理論では、それを適用する社会生活における人間関係を、その言語使用への影響という観点から、以下の2種類に分けて考える。

- a 人間関係を確立・維持する必要性、希望、見通しがある関係（家族、職場、近所等、通常、交友関係があり、また、初対面でもその後の関係継続の必要性、希望、見通しがあるもの、誰かの紹介によるものなどを含む）

- b 人間関係が継続する必要性、希望、見通しのない関係（電車やエレベーターに乗り合わせた人同士等）²¹⁾

DP 理論は、この双方を視野に入れ、人間の行動原理の体系化を目指しているが、まずは、a の関係にある人同士のやりとりを前提として論を展開している。本稿では、紙幅の都合もあり、DP 理論の骨格としてこれまで提示されていた内容への追加・修正点の要点を以下に簡単に紹介するに留める。

- (1) B&L のフェイス侵害度の見積もりの公式の修正

「話し手のフェイス保持欲求度」と「聞き手のフェイス保持尊重度」の兼ね合い、当然性（権利と義務）の観点、傍聴者の有無の要因など、Rx 要因の下位項目の選定と位置付けを行う。

- (2) 「フェイス均衡原理(Face-balance principle)²²⁾」という捉え方の導入

いくつかのやり取りだけにとどまらないより長い会話におけるグローバルな観点からのフェ

イスワークを、「フェイス侵害行為」だけでなく「フェイス充足行為」を加えて捉える。さらには、「人間関係の中・長期的な継続の必要性、希望、見通しの有無」という、よりマクロなレベルから話を捉え、「フェイス均衡原理(Face-balance principle)」という捉え方を導入する。これは、ある会話におけるフェイス侵害度の不均衡を、次の会話で解消することも可能であるという捉え方である。DP 理論では、このようなマクロな視点も含めて、ローカルな個別の会話のやりとりのポライトネスを考えていく。

- (3) 個別言語における敬語研究の位置付け

「敬語研究」「待遇表現研究」は、DP 理論構想の中で、有標行動の「フェイス侵害度に応じて選択される言語ストラテジー表現」を具体的に呈示化していく際に、極めて重要である。

今後は、上記3点を含む DP 理論の新展開について、より具体的な全体像の構想を提示するとともに、ポライトネスの普遍理論研究と、個別言語の敬語研究の接点をまとめ、その相互活性化のあり方にについても展望を示していく。しかし、それは、次の機会に譲るしかない。

注

- 1) 基本的に非言語行動にも適用できる捉え方であると考えているが、まずは、複雑化を避けるため、言語行動に重点を置いた形でまとめていく。
- 2) 非西欧の視点、アジアの視点を打ち出していくことは、極めて重要であると考えるが、それをより説得力をもって成すには、より堅固なデータや根拠を基に、論理的に提出する必要がある。
- 3) 記述研究と理論研究が相互に刺激しながら発展することが理想的であり、それが成功している分野もあるが、残念ながら、「ポライトネス研究」においては、両者がうまく噛み合っていないことが最大の問題となっている。
- 4) 今後の議論のために、B&L のポライトネス理論の4つの骨子を簡単にまとめておく。①B&L は、「基本的欲求としてのポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイス」という二種類のフェイスを脅かさないように配慮すること」が、「ポライトネス」であると定義した。②相手のフェイスを脅かす可能性のある行為を「フェイス侵害行為(FTA: Face Threatening Act)」と呼び、相手の「フェイス侵害度(FT度: degree of Face Threat)」が高くなればなるほど、よりポライト

なストラテジーが必要になるとして、以下のように象徴的な公式にまとめた。

$Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx$
D: Distance P: Power Rx: Risk of imposition

S: Speaker H: Hearer
 Wx : 「フェイス侵害度(FT度)」-行為(x)が相手のフェイスを脅かす度合い

D: 話し手(Speaker)と聞き手(Hearer)の「社会的距離(Social Distance)」
P: 聞き手(Hearer)の話し手(Speaker)に対する「力(Power)」

Rx: 特定の文化で、行為(x)が「相手にかける負荷度」の絶対的順位に基づく重みづけ(absolute ranking of imposition)」

③また、FT 度の高さに応じたポライトネス・ストラテジー選択の傾向を枝分かれ図(p.60)の形でまとめた。④具体的な主要ストラテジー 40 を挙げ、説明した。

5) これらの批判自体の問題点については、宇佐美(2001a, 2002; Usami 2002a)等を参照のこと。

6) この会議におけるいくつかの論文は、Lakoff & Ide(2005)にまとめられている。

7) B&L の理論において、普遍理論構築のためのパラメーターとして、操作的に定義された「フェイス」の概念を、「文化相対性」の観点から問題視し、B&L の理論の普遍性を批判するような捉え方をすると、結局は、このような結論に至ってしまうことは、その批判が始めた当初から自明のことであったと筆者は考える。(本文 2.(I) 参照)

8) 社会学の一手法として発達した会話分析(CA: Conversation Analysis)であるが、現在は言語学を背景とする研究者での方法を取る者が増えている。筆者は、「言語社会心理学的アプローチ」と称し、定量的分析と定性的分析の両方を含む「会話分析」の方法を提唱しており、同じ「会話の分析」と言つてもその方法論や目的は、異なる(宇佐美, 1999, 2006)。

9) 心理学の分野においては、従来の心理学研究があまりにも「人間」を画一視し、その多くの理論に「社会的要因」や「文化相対性」の考慮が欠けていた点が、問題視されている。筆者もその点には賛同するが、ここでの指摘は、その次元以前の問題である。

10) 従来、概念を正確に表す適当な日本語がないこと、また、カタカナ表記による冗長を避けるため、B&L の言う positive face, negative face をそれぞれ「ポジティブ・フェイス」、「ネガティブ・フェイス」として紹介してきたが(宇佐美, 1998, 2001a, 2002), 誤解を避け理解を早めるためには、同じ意味を表す negative face want, positive face want のほうを取り上げ、それが「欲求」であることを強調したほうがわかりやすかったかもしれないと考えている。また、昨今の B&L のポライトネス理論の概要や基本的概念の浸透度を鑑み、文脈によっては、positive face want は、「親

- 近欲求」, negative face want は、「不可侵欲求」という日本語を使う。(吉岡泰夫氏(国立国語研究所)の口頭での提案に賛同するものである。)
- 11) 学問的アプローチを「派」に分けることは、筆者の意図ではない。ここでは、後に「言及する」際の冗長を避けるために、便宜上、簡略化して用いる。
- 12) リーチ, B&L を含む9つのボライトネスに関する主張を「代表的なもの」としてあげ、それらを、第一種、第二種ボライトネスという観点から批判的に分析しているが、ボライトネスをわざわざ2つに分けて見ようすることによって、かえって、現象の捉え方が限定され、逆に Eelen 自身の両者の混同が露呈した感がある。また、Eelen が取り上げた理論の中には、「理論」というには、あまりにも体系性のないものも含まれており、そもそも Eelen が代表的なとした理論の「選定」に、他の選択もあったのではないかといふ指摘(Davies, 2005)もなされている。
- 13) Fraser (1990), 蒲谷・川口・坂本 (1998), 川口・蒲谷・坂本 (2002)などにもその発想がある。
- 14) このような基本的な点は、その後研究者として独立する前の、博士課程までの学生に、基本事項として、しっかり教育しておくべきことと考える。
- 15) 宇佐美 (1993b, 1998)などにも通じる。
- 16) B&L (1987: 236) は、「バランス原理 (balance principle)」として、簡単に触れているが、体系化するところまでは至っていない。
- 17) 普遍理論派のアプローチは、「ボライトネスの概念」というものを先に規定してから、その概念を用いて実際の現象を分析・解釈していくのではない。対人配慮行動の動機や解釈の普遍的原則を解明するために、逆に、操作的に定義した対人配慮行動に「ボライトネス」と命名した上で、その普遍的原則を追究しているのである。このような捉え方に対する論証派の誤解は致命的である。
- 18) 本稿では、詳述する紙幅がない。宇佐美 (2008 予定) を参照されたい。
- 19) ボライトネス研究の流れの概観。B&L のボライトネス理論の問題点などについては、宇佐美 (1993b, 1998, 2001a, 2002), Usami (2002a, 2006b) を参照されたい。
- 20) 「操作的定義」については、宇佐美 (2005) を参照。
- 21) エレベーターで乗り合わせた人に、日本人はあまり話しかけない(ネガティブ・ボライトネス重視)が、アメリカ人は、声をかける(ポジティブ・ボライトネス重視)のが、一種の典型例として話題に上ることがある。文化によって、特定の状況における「基本状態」が違うことの好例であろう。この現象も、基本的に DP 理論で説明しうると考えるが、それに、マクロな観点からの「対人関係」の捉え方にも言及する必要があるので、本稿では、扱わない。尚、エレベーターでの行動については、Goffman (1971: 32) に興味深い記述がある。
- 22) Goffman (1972: 19) に、既に 'correcting the disequilibrium' という概念が出されている。B&L (1987: 236)

も、ローカルな観点からのやりとりを例に、それを「バランス原理 (balance principle)」として触れているが、それを彼らのボライトネス理論の中に位置付け、体系化するところまでは至っていない。DP 理論は、人間の相互作用をボライトネスに焦点を当てて捉えるが、むしろ、対人コミュニケーション論として、どちらかと言うと、B&L よりも、Goffman に近いマクロな観点を適用していく。

【引用文献】

- Bayraktaroglu, Arin (1991). Politeness and interactional imbalance. *International Journal of the Sociology of Language*, 92, 5-34.
- Brown, Penelope, & Levinson, Stephen C. (1978). Universals in language usage: Politeness phenomena. In Goody, E. N. (Ed.), *Questions and politeness: Strategies in social interaction*. pp. 56-289. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, Penelope, & Levinson, Stephen C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Brown, Roger (1990). Politeness theory: Exemplar and exemplary. In Rock, I. (Ed.), *The legacy of Solomon Asch: Essays in cognition and social psychology*. pp. 23-38. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates.
- Brown, Roger, & Gilman, Albert (1989). Politeness theory and Shakespeare's four major tragedies. *Language in Society*, 18, 159-212.
- Davies, Bethan (2005). Book review of Eelen (2001). *Journal of Politeness Research*, 1, 155-160.
- Eelen, Gino (2001). *A critique of politeness theories*. Manchester: St. Jerome's Press.
- Forgas, Joseph (1999a). Feeling and speaking: Mood effects on verbal communication strategies. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 850-863.
- Forgas, Joseph (1999b). On feeling good and being rude: Affective influences on language use and request formulations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76, 928-939.
- Fraser, Bruce (1990). Perspective on politeness. *Journal of Pragmatics*, 14, 219-236.
- Fraser, Bruce (2005). Whither politeness. In Lakoff, Robin T., & Ide, Sachiko (Eds.), *Broadening the horizon of linguistic politeness*. Amsterdam: John Benjamins.
- Fukushima, Saeko (2002). *Requests and culture: Politeness in British English and Japanese*. Bern, New York: P. Lang.
- Goffman, Erving (1971). *Relations in public: Microstudies of the public order*. New York: Harper Torchbooks.
- Goffman, Erving (1972). *Interactional Ritual*. London: Penguin.
- Gu, Yueguo (1990). Politeness phenomena in modern Chinese. *Journal of Pragmatics*, 14, 237-257.
- Hewitt, J. P., & Stokes, R. (1975). Disclaimers. *American Sociolinguistic Review*, 40 (1), 1-11.
- Holtgraves, Thomas M. (2002). *Language as social action*. Mahwah, NJ, London: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Holtgraves, Thomas M. (2005). Social psychology, cognitive psychology, and linguistic politeness. *Journal of Politeness Research*, 1, 73-93.
- Ide, Sachiko (1989). Formal forms and discernment: Two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua*, 8(2), 223-248.
- 生田少子 (1997). ボライトネスの理論 月刊言語, 26(6), 66-71.
- Janney, Richard W., & Arndt, Horst (1992). Intracultural versus intercultural tact. In Watts, Richard J., Ide, Sachiko, & Ehlich, Konrad (Eds.), *Politeness in language: Studies in its history, theory and practice*. pp. 21-41. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Janney, Richard W., & Arndt, Horst (1993). Universality and relativity in cross-cultural politeness research: A historical perspective. *Multilingua*, 12, 13-50.
- Jary, Mark (1998). Relevance theory and the communication of politeness. *Journal of Pragmatics*, 30, 1-19.
- Kasper, Gabriele (2006). Speech acts in interaction: Towards discursive pragmatics. In Bardovi-Harlig, K., Félix-Brasdefer, C., & Omar, A. (Eds.), *Pragmatics and language learning*, 11, pp. 281-314. Honolulu, HI: National Foreign Language Resource Center.
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998). 敬語表現 大修館書店
- 川口義一・蒲谷宏・坂本恵 (2002). 「敬語表現」と「ボライトネス」 社会言語科学, 5(1), 21-27.
- Lakoff, Robin T., & Ide, Sachiko (2005). *Broadening the horizon of linguistic politeness*. Amsterdam: John Benjamins.
- 李恩美 (2004). 「丁寧度を示すマークのない発話」の日韓対照研究—初対面二者間の自然会話分析を通して— 東京外国语大学日本課程・留学生課(共編) 日本研究教育年報, 8 (2003年度版), 東京外国语大学 pp. 57-82.
- 李恩美・木林理恵・金銀美・木山幸子 (2006). 言語社会心理学的アプローチによる会話分析の方法 宇佐美まゆみ(編) 自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ(言語情報学研究報告13) 21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」 東京外国语大学大学院地域文化研究科 pp. 47-76.
- Locher, Miriam A. (2004). *Power and politeness in action: Disagreements in oral communication*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Locher, Miriam, & Watts, Richard J. (2005). Politeness theory and relational work. *Journal of Politeness Research*, 1(1), 9-33.
- Matsuimoto, Yoshiko (1988). Reexamination of the university of face. *Journal of Pragmatics*, 12, 403-426.
- Meier, A. J. (1995). Passages of politeness. *Journal of Pragmatics*, 24, 381-392.
- Mills, Sara (2003). *Gender and politeness*. Cambridge: Cambridge University Press. (熊谷滋子訳 (2006). 言語学とジェンダー論への問い合わせ 明石書店)
- 三牧陽子 (2002). 待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のボライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に— 社会言語科学, 5(1), 56-74.
- 宮武かおり (2007). 日本人友人間の会話におけるボライトネス・ストラテジーースピーチレベルに着目して— 東京外国语大学大学院地域文化研究科修士論文.
- Slugski, Ben, & Turnbull, William (1988). Cruel to be kind and kind to be cruel: Sarcasm, banter and social relations. *Journal of Language and Social Psychology*, 7, 101-121.
- Spencer-Oatey, Helen (2007). Theories of identity and the analysis of face. *Journal of Pragmatics*, 39(4), 639-656.
- Suzuki, Toshihiko (2007). *A pragmatic approach to the generation and gender gap in Japanese politeness strategies*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- 滝浦真人 (2005). 日本の敬語論 大修館書店
- Thomas, Jenny (1995). *Meaning in interaction: An introduction to pragmatics*. London: Longman. (浅羽亮一監修・田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真里訳 (1998). 語用論入門 研究社出版)
- 宇佐美まゆみ (1993a). 初対面二者間会話における会話のストラテジーの分析: 対話相手に応じた使い分け という観点から 学苑, 647, 37-47.
- 宇佐美まゆみ (1993b). 談話レベルから見た“politeness”: “politeness theory”的普遍理論確立のために ことば, 14, 20-29.
- Usami, Mayumi (1994). *Politeness and Japanese conversational strategies: Implications for the teaching of Japanese*. Qualifying paper, Harvard University, Cambridge, Massachusetts.
- 宇佐美まゆみ (1995). 談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト発生の条件と機能— 学苑, 662, 27-42.
- 宇佐美まゆみ (1997). 「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ボライトネス 現代日本語研究会(編) 女性のことば・職場編 ひつじ書房 pp. 241-268.
- 宇佐美まゆみ (1998). ボライトネス理論の展開: ディスコース・ボライトネスという捉え方 東京外国语大学日本課程・留学生課(共編) 日本研究教育年報 1997年度版, 東京外国语大学 pp. 147-161.
- 宇佐美まゆみ (1999). 談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ— 日本語学, 18(10), 40-56.
- Usami, Mayumi (1999). *Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness*. Doctoral Dissertation, Graduate School of Education, Harvard University, Cambridge, Massachusetts.
- 宇佐美まゆみ (2001a). ボライトネスの談話理論構想 国立国語研究所(編) 談話のボライトネス 凡人社

- pp.9-58.
宇佐美まゆみ (2001b). 「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること— 東京外国语大学語学研究所論集, 6, 1-29.
- 宇佐美まゆみ (2002). 遠職「ポライトネス理論の展開 1-12」月刊言語, 31(1-5, 7-13)
- 宇佐美まゆみ (2003). 異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から— 国語学, 54(3), 117-132.
- 宇佐美まゆみ (2005). 操作的定義 日本語教育学会編 新版日本語教育事典 大修館書店 pp.620-621.
- 宇佐美まゆみ (2006). 談話研究におけるローカル分析とグローバル分析の意義 宇佐美まゆみ(編)自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ(言語情報学研究報告13) 21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国语大学大学院地域文化研究科 pp.229-243.
- 宇佐美まゆみ (2008予定). ディスコース・ポライトネス理論の新構想.
- Usami, Mayumi (2002a). *Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Usami, Mayumi (2002b). A preliminary framework for a discourse politeness theory, paper presented at the Politeness and Power Conference, September 14, Loughborough, UK.
- Usami, Mayumi (2006a). Discourse politeness theory and cross-cultural pragmatics. In Yositomi, Asako, Umino, Tae, & Negishi, Masashi (Eds.), *Linguistic informatics V*:

- Studies in second language teaching and second language acquisition*, pp. 9-31. 21st Century COE: Center of Usage-Based Linguistic Informatics, Graduate School of Area and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies (TUFS).
- Usami, Mayumi (2006b). A preliminary framework for a discourse politeness theory: Focusing on the concept of relative politeness. *Studies in language sciences (5): Papers from the fifth annual conference of the Japanese society for language science*, pp. 29-50. Tokyo: Kuroiso Publishers.
- Usami, Mayumi (2006c). Discourse politeness theory and second language acquisition. In Chan, Wai Meng, Chin, Kwee Nyet, & Suthiwat, Titima (Eds.), *Foreign language teaching in Asia and beyond: Current perspectives and future directions*, pp. 45-70. Centre for Language Studies, Faculty of Arts and Social Sciences, National University of Singapore.
- Watts, Richard J. (1992). Linguistic politeness and politic verbal behavior: Reconsidering claim for universality. In Watts, Richard, Ide, Sachiko, & Ehlich, Konrad (Eds.), *Politeness in language: Studies in its history, theory and practice*, pp. 43-69. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Watts, Richard J. (2003). *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.

(2007年12月26日受付)
(2008年6月9日修正版受付)
(2008年6月22日掲載決定)

展望論文

ポライトネスから見た敬語、敬語から見たポライトネス

—その語用論的相対性をめぐって—

滝浦 真人(麗澤大学)

“忌避関係 対 冗談関係”, “敬語 対 タメ語”, “ネガティブ・ポライトネス 対 ポジティブ・ポライトネス”という3組の二項対立の間には平行関係が存在し、後二者は語用論的な性質をもつて“忌避関係～冗談関係”という人類学的な区分と異なっている。本論文では、その2つの二項対立について、語用論的相対性に焦点を当てながら論じる。第一に、対人的な〈距離〉の表現手段である敬語は、非敬語とともに、話し手からの共感度に応じて人間関係を描画する。話し手が関係をどう見なすかによって描かれる像は異なり、それゆえこの働きは社会言語学的ではなく語用論的なものである。第二に、敬語は談話上で、“表敬”“品位保持”“あらたまり”“疎外”そして“親愛”といった多様な機能を果たし、ときには、同じ形式を使用しても、遠隔的/近接的という正反対の効果が生じることさえある。鍵を握るのは文脈的要因の働きであること、そして、敬語と非敬語の談話上の働きを捉えるには、意味機能と語用論的機能を関数的に結びつける枠組の構築が必要であることを主張する。

キーワード：忌避関係／冗談関係、ネガティブ・ポライトネス／ポジティブ・ポライトネス、忌避の有標性／親密さの有標性、〈距離〉の相対性、*f*(意味機能)=語用論的機能

Honorifics Seen from Politeness, Politeness Seen from Honorifics:
An Overview Focusing on Their Pragmatic Relativity

MasatoTAKIURA (Reitaku University)

There are parallelisms between the three dyads, 'avoidance relationship vs joking relationship', 'honorifics vs non-honorifics' and 'negative politeness vs positive politeness'. The latter two pairs differ from the first anthropological one in that they are pragmatic in nature. This study looks at these two pairs in terms of pragmatic relativity. Firstly, as a means of indicating 'distance' between people, honorifics/non-honorifics delineate a picture of the human relationship on the basis of the empathy of the speaker. This is not a socio-linguistic but a pragmatic phenomenon, in that the picture always differs depending on the speaker's assumption. Secondly, honorifics seem to perform many different discourse functions like showing deference, demeanor, formality, alienation, and affection, and sometimes the use of the one form can even have opposite functions like showing distance and proximity. This paper argues that context in discourse plays key role, and that in order to see how honorifics and non-honorifics work in discourse, it is necessary to devise a scheme which formulates the contextual relations between their semantic and pragmatic functions.

Key words: avoidance relationship/joking relationship, negative politeness/positive politeness, markedness of avoidance/markness of solidarity, relativity of 'distance', *f*(semantic role)=pragmatic role